

虚仮、虚仮を知らず

一、やめよひまごと

甲「おちる機が助けられるのですか、助けられておちる機が知られるのですか。」
乙「そんなことを聞いて何にしますか。」
甲「いやちょっとその問題になりましたが、わかりませんので。」
乙「それでもあなたはさつきまで人に話していたではないか。」
甲「話してはいましたが、そこがはつきり知りたいのです。」
乙「知って何にします。」
甲「別に何にするというわけありませんが。」
乙「何にもしないのでしたらやめておきましょう。そんなところに宗教があるのでは
ありません。如来の血があるのではない。われらはただ、衷心の願いをもつて仏の
教えに打ちあたるべきであります。」

二、精神的ゴロ

甲「先生、私に聞かしてください。仏様は助けてくれますか……ああそうですか、それ
なら私は聞きます。私は助かりたいのです。どうしたら助かりますか。」
乙「あなたが助かりたいとは、いったいどうなりたいのですか。」
甲「地獄におちることがいやなのです。極楽に参りたいのです。」
乙「死後の問題ですか。」
甲「そうです。出かける後生が助かりたいのです。」
乙「もつと今、あなたの衷心の願いはありませんか。」
甲「それが私のいっばいの願いです。私は苦しいのです。先刻からあれだけ聞いて
も、私の心の底には聞いてくれないものがあるのです。何を聞かされても、どうも
どうもと聞いてくれないのです。」
乙「妙な心ですね。そんな求め方より、一言一句を受け取って、じつと消化してみた
らいかがですか。何でもかでも、聞かん聞かんと棄てないで。」
甲「聞かねば参られないでしょう。じつとしていられません。それに私の心はどうも
どうもです。」
乙「いったいあなたは歳はいくらです。学校はどこまでゆきましたか。」
甲「二十五歳です。中学校を出ました。」
乙「私は君を見るとおかしい気がします。まるで老人です。よくも若い人が、それほ
どの精神的ルンペンに、宗教的ゴロツキになられたことです。青年には青年の世界
があるはずですよ。それほどの墮落を見たことがない。おやめなさい、いかに真剣に
見えたって偽りですよ。もし本気であるとすれば、あなたは不思議な存在です。あな
たは、『どうもどうも宗』の幽霊です。おたがい短い人生です、つまらぬことに時
間と脳力を空費しないようにしましょう。三年も五年も、どうもどうもと言ってい
たって何にもなりません。あなたはそのみじめな遊戯からあなたを救いなさい。
さつきからあなたの様子を聞いていますと、『そのあなたのどうもどうもが尊いこ

とです。それが信仰の相です、それが法蔵の願心です。』とでも言ってもらいたいのでしょう。それは邪道です。邪道におちてゆくとなかなか上れなくなります。』

三、信と救い

甲「如来のお助けは疑われないのですが、どうしても信心がぐらつくのであります。どうしたらいいのでございませうか。」

乙「おかしなことですね。如来の救いは疑われないが、信心がぐらつく……その心持ちはわかりますが、もう一段と深く聞いてゆきましょう。如来のお救いと信心はどんな関係があるのでしょうか。」

甲「それは信ずる者が救われるのです。」

乙「その言葉の中に二つの世界を考えることができます。」

(1) 信ずる者が救われる……つまり信ずるということに救いの条件のよう
考えること

(2)、救われることを信ずる……信は救いの条件ではなくして、救いは信によつて実現するけれども、信は要であつて、条件ではない。」

甲「そこをもつとはつきり知らしてください。信がなければ救われないのでしよう。」

乙「救いというものが目的で、その救いのために必要な条件なるがゆえに、『信心』するという心には真の信は生まれません、それは信が一つの手段になるからです。正しい信は、信そのものが救いであり、信そのものが目的であり、全体であつて、手段ではないのです。信の意味を救いというのであり、救いの実現を信ずるのですから、救いと信と二つあるのではなく、すなわち救いを信ずるのです。救いは別にあつて、その別にある救いを信ずるのではないのです。信ずることすなわち救われることです。したがつて、『如来の救いは疑われない』と言えば、信ずることなのです。それなのに、まだ信がぐらぐらするといふのではおかしい。それではつまり、如来の救いを信じないことになる。」

甲「なぜ私のような心がおこるのでしようか。」

乙「それははつきりわかっています。つまり自力の信なのです。もう一つ言いかえらんと、功利的な信なのです。その世界では必ず善人正機の救いが考えられているのです。自力……功利的……善人正機……みんな聖人の信境とはちがっています。」

甲「そうでしょうか。」

乙「お話を聞いて感激した美しい心の時は、じつにりつぱな信のような気がするでしょう。ところがしばらくたつて平常の心になると、もういけなくなるでしょう、それが美しい心すなわち救われた心で、善人こそ救われるとされているではありませんか。」

甲「なるほどそうでした。」

乙「あなたはあなたを如来にまで高めようとしています。それには、あなたを、廃悪修善か、息慮凝心とて、その心の波を静めてか、どちらにしても、あなたの内部を改造して如来の世界まで自分を高めようとする。しかし、あなたが如来になるので

はなくて、如来があなたになるのです。これを別の言葉で言えば廻向です。南無阿彌陀仏が、あなたになりきるのです。与えきるのです。」

甲「信心とは……………」

乙「南無の心が信心です。南無と言つても阿彌陀仏をはなれたものではなくて、南無すなわち阿彌陀仏です。言いかえると、六字全体が大信心です。如来の絶対心そのものが大信心海です。この如来の大信心海がそのまま衆生の腹のすわりになるのです。如来の大信心と私の信心と二つあるのでなくて、如来の大信心海すなわちわれの大信心海です。近いと言うもなお遠く、親しいと言うもなおおろか、念ぜられる仏心も、念ずる帰命の心も、南無阿彌陀仏一体のうちにあるのです。微塵もそこに加えられない、アアもヘイも入れられない、一切の言説の打ち絶えた境地です。」

甲「まことに私は今まで愚かでした。何だか広い天空に放たれた気がします。」

乙「あなたのはからいが知れましたか。」

甲「さつきのお話の、汽車の中で汽車を押すようなバカなことでした。平素のみ教えの、穢国に化する親心が味わえます。私の小さいはからいで如来を呼びさまそうとしていました。が、如来こそ、私によびかけ、よびさましていただくさつたのです。これからいよいよ限りなく如来を聞いて生きさせていただきます。聞かすにはおれない心がわいてきます。」

乙「如来に生きるがゆえに、より深い地獄におちてゆくとしたらどうします。」

甲「念仏道が、よし地獄だろうと私には問題ではありません。」

乙「全身全霊如来の生きます舞台です。金剛不壊の大信心海にあなたの過去、未来、現在、生かされます。」

四、信か我慢か

乙「あなたはいつごろ、救われましたか。」

甲「今から十五年ほど前でした。」

乙「それから後はどんな心で生きてきましたか。」

甲「どうかしてたくさんな人にこのありがたい世界を知らせたいと思つて及ばずながら働いてきましたし、説教へもそれからずつと参つてきましたが、どうも近ごろは聞かれる話が少ないですな。一念帰命の水際を説く人が少ないですな。私どもはそこは出ましたからいいが、法体ばかり説いていて、機の一念がない、ご教化はねつけて少しも聞かぬこの機を見せてくれる人がない。」

乙「あなたは、十五年間、ただその一念帰命とやらの復習をしてきましたね。お気の毒なこと。」

甲「何がお気の毒です。人の信心に難くせをつけるのですか。」

乙「あなたは、十五年昔、あなたをも如来をも棄ておいて来ましたね。そして殻を一つつかんで、あなたは如来を聞いているのではなくて、説教に殻を合わしているのです。そこにいる者はただ我慢だけ！」

甲「何！それだから、あなたの言うことがいやなのです。」

乙「痛いところをおさえるからでしょう。食事することは復習ではない。久遠劫来の胃病が治らない証拠には、何一つ受けつけないではないか。十五年昔の水の上の絵が今日何になる。正しい信の人は今日、今、仏、法、僧の三宝のある世界に生かされていきます。あなたの一言一言は、聖人を裏切り、如来を裏切り、ただあなたの十五年前の一念をふりまわしているだけです。今一度ほんとのあなたにお帰りなさい。我慢、我慢を見ず、虚仮、虚仮を知らない。あなたを珍重するがゆえにあえて申しあげたのです。私一人が言っているのではない、あなたの我慢をおそれだれも言えないのです。その自力金剛の浄土まじりの相から、無間大地獄、五逆誹法のおそるべき機を生み出してください。そこにのみ法蔵の心は動いています。私は賢明なあなたが、過去でなく、未来でなく、今日のあなたが今日の大慈悲に生かされる生きた信に帰られることを信じます。」